

脱力系と上昇志向の「これが私の生きる道」

輸出産業としての JPOP

近ごろ私達はいいい感じ
悪いわねありがとね これからもよろしくね
もぎたての果実のいいところ
そういう事にしておけば これから先もイイ感じ
もしも誰かが不安だったら
助けてあげられなくはない
うまくいってもダメになっても
それがあなたの生きる道
もえてる私達はいいい感じ
生きているあかしだね
世の中がすこし見えたね
もぎたての果実のいいところ
そういう事にしておきな
角度変えればまたイイ感じ

少くくは不安だつてば これが私の生きる道
近ごろ私達はいいい感じ
悪いわねありがとね これからもよろしくね
まだまだここからがいいところ
最後までみていてね くれぐれもじゃましないで
ね
もぎたての果実のいいところ
そういう事にしておけばこれから先もイイ感じ
それではさようなら
(作詩:奥田民生 作曲:奥田民生)

パフィーで GO!

東京都内には定席と言われる落語などの専門劇場が四軒ある。そこで活躍し、『寄席の怪人』と呼ばれるのは川柳川柳師である。彼の持ちネタは『ガーコン』と呼ばれるもので、軍歌を歌いながら、戦中戦後の世相を斬るというものだ。ここ 10 年ぐらいの歌は全く歌われないが、例外が一つだけある。それはパフィーの『これが私の生きる道』であり、このネタを『パフィーで GO!』という。

常日頃は、戦争中に敗色濃厚になるにつれて

軍歌が暗くなっていくところを歌って、笑わせるのだが、時としてパフィーの振りまね付きで歌い出し、こいつらは何を言っているのか、と笑い飛ばす。満場の中高年は大喝采である。

これはパフィーへの批判とか嫌悪とか、と捉えるべきではないと思う。まず寄席に集まる老人たちがパフィーを知っていると言うことが重要である。さらにパフィーの持っている脱力感やまったり感が、寄席という空間にマッチしているのである。

アメリカのパフィーと香港の小室

パフィーがデビューした 1996 年に全盛だったのは小室ファミリーであり、安室奈美恵のファッションをまねるアムラーに対して、パフィーのファッションをまねるのはパフィーとまで呼ばれた。つまりパフィーの存在は小室ファミリーへの一種のアンチテーゼと捉えられる。

その後の曲折を経て、小室哲哉の凋落を思うと、考えるところも大きい。小室哲哉の詐欺容疑は香港での事業失敗に負うところが大きいそうだ。一方、パフィーは低年齢層のアニメ番組から米国進出に成功し、人気を集めたとされる。

この理由を貿易パターンとして考えることもできよう。小室哲哉はユーロ・ビートなどダンスミュージックのアジア化による貿易を目指したのに対し、パフィーは昔ながらのまったり感や脱力系の輸出を目指したと考えられないだろうか。

国際貿易論にはクオリティー・ラダーモデルと呼ばれるモデルがある。品質の低い製品から高い製品まで、はしご(ラダー)のように並んでいるとすると、一国の経済発展につれて、その産出品ははしごを駆け上っているとするモデルだ。

小室ファミリーが上昇志向のもとで、はしごを駆け上っていく欲求を持つ音楽に対し、パフィーの場合ははしごを拒否し、現状肯定を強く感じさせるところに特色がある。

日本の伝統音楽

さらに言えばパフィーの雰囲気は、ある種の日本の伝統に近いと言えないこともない。長唄や常磐津など、日本の伝統音楽は言わば鼻歌めいたところに特色があつて、これでもかこれでもかと絶

唱するわけではない。

アメリカには『スター・サーチ』というタレント発掘番組があって、日本で言えばずいぶん昔の全日本歌謡選手権(長沢純司会)のような勝ち抜き形式である。(現在はアメリカン・アイドルという番組が有名。)この番組に出演する歌手志望の人たちが皆、熱唱また熱唱のスタイルであって、これがまた疲れるのである。近年の映画『ドリームガールズ』のジェニファー・ハドソンの熱唱が何人も続くと考えればよいのだろうか。一昔前だが、日本のアイドル発掘番組『スター誕生』とはかなり趣が違うのである。

ビルドゥングス・ロマンとしてのアイドル

アイドルは応援するところにその醍醐味がある、という。歌がうまい、人格が形成されたアイドルというものは少ない。10代の少年少女は、さまざまな大人からの抑圧を受ける自分を投影して、未熟なアイドルを応援するのが喜びなのであって、欠点が克服されれば応援する意味がない。

つまり歌が下手だ、という一昔前のアイドル批判はお門違いであって、歌が下手なところにファンは感情移入をするわけである。このようなプロセスは、未熟な青年が大人になって行く教養小説(ビルドゥングス・ロマン)と言うこともできよう。

パフィーと小室ファミリーの話に戻れば、小室ファミリーのようにダンス音楽で、かっこよく言うのも、一種の上昇志向であろう。一方、パフィーは歌はうまくなれないし、雰囲気はそのままである。つまりパフィーの存在は教養小説的上昇志向に対する、やはりアンチテーゼなのである。

そう考えると歌の下手なアイドルの存在は貴重であって、近年盛んなグラビア・アイドルでは青年の欲望を反映するばかりで、熟練と人格修養のプロセスが欠けているのではないか。なんだか議論がヘンになるようだが、停滞した我が国の現状を憂う気持ちが強まってくる、というのは大げさだろうか。あるいはこれを動物化というのだろうか。

上昇志向とこれでもいいのだ

米国進出が失敗した女性歌手は数多い。ピンクレディーはある程度、TVのレギュラー番組を持

つなど健闘したようだが、松田聖子や宇多田ヒカルは失敗に終わった。さまざまな理由はあるのだろうが、結局は特色のある輸出品でなかった、貿易論の用語で言えば、産业内貿易の製品差別化が十分でなかったことに理由があるのではないだろうか。

言うまでもなく貿易の利益が大きい場合、自国で産出できない品目を輸入することにある。上昇志向と人生の勝ち負けの歌なら、アメリカにはいくらでもある。しかし脱力感とまったり系なら日本の他にない。

先日亡くなった赤塚不二夫は『これでいいのだ』という言葉を残した。寄席でもアメリカでも受けるパフィーは『これでいいのだ』精神を体現している。ただ筆者には、これでいいのだ、ばかりでよいのか、少し疑問を持たないでもないのである。

さて本連載も今回で終わりである。ナウイヤングにバカうけだったのだろうか。それともナウイヤングと言う言葉が分かる世代だけが読者だったのだろうか。とにかく『これが私の生きる道』のように、「そういう事にしておけばこれから先もイイ感じ それではさようなら」とお別れすることにしよう。

脇田成

22×65行 2400

12月20日締め切り